

ノ檢閲ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八十二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル信書ハ

一個月一次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス

第八十三條 在監人ノ發スル信書ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書

中忌諱ニ涉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サス

第八十四條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來ル信書ハ典獄之ヲ檢閱シ

適正ノ事項ヲ陳ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限り之

ヲ本人ニ付與ス若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之

ヲ付與セス

第八十五條 信書ヲ檢閱スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀

又ハ橫讀シ嫌疑ノ文意アリヤ否ヲ詳查スヘシ

第八十六條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ典

獄之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署

ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム

親屬故舊若シハ辨護人ノ信書ハ監獄署ニ宛之ヲ差出サシムヘ

シ

○第四章 接見

第八十七條 在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄先ツ之

ニ面接シテ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ已ムヲ得

サルノ專狀アリテ形跡ノ疑フヘキコトナキトキハ之ヲ許シ看守

長看守並蒞テ面會セシム但密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サス

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ

違フ談話ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ

集治監ニ押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ

前條第一項ノ例ニ依テ之ヲ許ス但面會ノ時間ハ五十分時ヲ過

ルヲ得ス

○第五章 差入品

第八十九條 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服
臥具又ハ飲食物炊煮ヲ要セサルモノニシテ贈ラント請フトキ
ハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラ
ス

第九十條 己決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第九十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ
金錢衣服家具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セ
シムヘシ

○第四編

○第一章 教誨

第九十二條 已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷
善ノ道ヲ講セシム

第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開
シモノトス

第九十四條 懲治人ニハ毎日三四時間讀書習字算術度量圖書等
ノ科目中ニ就キ之ヲ教フヘキモノトス
學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表
スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏
名年齢等ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閲ニ供シ又ハ其尊屬親
ニ示スコトアルヘシ

第九十五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易
カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十
四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

揭示

- 一 在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ
- 一 平日五ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ慎テ容止ヲ正フスヘシ 未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 毎朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ
- 一 毎朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及ヒ席壁厠圍等ヲ掃除スヘシ
- 一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ニ睡キ時水ヲ濫用スルヲ禁ス
- 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ全往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス
- 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起歩スルヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス
- 一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アルヲ禁ス
- 一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ス 未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス
- 一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ
- 一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ
- 一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ

一病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其
看病人タラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ

一水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内
ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏
ヨリ犯者ヲ問テニ當リ之ヲ舉ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分ス
ヘキモノナリ

年月日

某監獄署

○第二章 賞譽

第九十六條 已決囚獄則テ謹守シ且改悛ノ行爲著キ者ト典獄ニ
於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第九十七條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣
ノ左袖ノ表面ニ方二寸曲ノ淺藍色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九十八條 賞表ハ假出獄院閉門又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト
爲スヲ得

第九十九條 賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ接見
及ヒ通信スルヲ許ス

第一百條 已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ
係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金二十五鎊以
下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ預置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ
食物ヲ講求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス
第一百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞動アルトキハ之ヲ録シテ檢
察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第一百二條 懲治人第一百條ニ適シタル勞動アルトキハ金二拾五鎊
以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

○第三章 懲罰

第三百三條 已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

- 一 絶信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス
- 二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス
- 三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

第四百四條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食閤室ハ七晝夜ヲ限トス

減食閤室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一月之ヲ免シ更ニ之ヲ科スルコトヲ得

第三百五條 懲治人及ヒ十六歳未滿ノ已決囚獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

- 一 獨愼 晝夜一室ニ獨居セシム
 - 二 減食 常食ノ半以内ヲ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラス
- 第三百六條 獨愼ハ七晝夜以内減食ハ三日以内トス
- 第三百七條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ煽惑シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第三百三條第三百五條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

第三百八條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タルトキハ賞表一個又ハ數個ヲ獲テ得

第三百九條 無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シ其他重罪輕罪ヲ犯ミタルトキハ三月以上五年以下兩脚又ハ一脚ニ鈇ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其鈇

ニ貫キ腰間ニ線帶セシメ線帶ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝
間ハ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ
照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ
之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス其外役ニ服ス
ルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第一百十條 減食或ハ閉室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシ
テ診視セシメ身體ニ妨ナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ

第一百十一條 屏禁減食閉室又ハ獨愼ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若
クハ看守長時々其動靜ヲ窺察シ狀況ニ由リ醫師及ヒ教誨師ヲ
シラシメテ問ハシムルコトアルヘシ

第一百十二條 規則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ルトキハ之ヲ

免スルコトヲ得

第一百十三條 假出獄免閉室ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ
違背シタルトキハ七日以下之ヲ拘留スルコトヲ得

△(十五公布第三十六號)戒嚴令別冊ノ通制定ス

戒嚴令

第一條 戒嚴令ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵備ヲ以テ全國若クハ
一地方ヲ警戒スルノ法トス

第二條 戒嚴ハ臨戰地境ト合圍地境トノ二種ニ分ツ

第一 臨戰地境ハ戰時若クハ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區
畫シテ臨戰ノ區域ト爲ス者ナリ

第二 合圍地境ハ敵ノ合圍若クハ攻撃其他ノ事變ニ際シ警戒
ス可キ地方ヲ區畫シテ合圍ノ區域ト爲ス者ナリ

第三條 戒嚴ハ時機ニ應シ其要ス可キ地境ヲ區畫シテ之ヲ布告ス

第四條 戰時ニ際シ鎮臺營所要塞海軍港鎮守府海軍造船所等遠カニ合圍若クハ攻撃ヲ受クル時ハ其地ノ司令官臨時戒嚴ヲ宣告スルヲ得又戰略上時機ノ處分ヲ要スル時ハ出征ノ司令官之ヲ宣告スルヲ得

第五條 平時土寇ヲ鎮定スル爲メ臨時戒嚴ヲ要スル場合ニ於テハ其地ノ司令官速ニ上奏シテ命ヲ請フ可シ若シ時機切迫シテ通信斷絶シ命ヲ請フノ道ナキ時ハ直ニ戒嚴ヲ宣告スルヲ得

第六條 軍團長師團長旅團長鎮臺營所要塞司令官或ハ艦隊司令官艦隊司令官鎮守府長官若クハ特命司令官ハ戒嚴ヲ宣告シ得ルノ權アル司令官トス

第七條 戒嚴ノ宣告ハ爲シタル時ハ直ニ其管轄及ヒ事務ヲ具シテ之ヲ大政官ニ上申ス可シ

但其隸屬スル所ノ長官ニハ別ニ之ヲ具申ス可シ

第八條 戒嚴ノ宣告ハ曩ニ布告シタル所ノ臨戰若クハ合圍地境ノ區畫ヲ改定スルヲ得

第九條 臨戰地境內ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ノ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十條 合圍地境內ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ハ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十一條 合圍地境內ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ヒ左ニ開列ス

ル犯罪ニ係ル者ハ總テ軍衙ニ於テ裁判ス

刑法

第二編

第一章 皇室ニ對スル罪

第二章 國事ニ關スル罪

第三章 靜謐ヲ害スル罪

第四章 信用ヲ害スル罪

第九章 官吏瀆職ノ罪

第三編

第一章

第一節 謀殺故殺ノ罪

第二節 毆打創傷ノ罪

第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪

第七節 脅迫ノ罪

○第二章

第二節 強盜ノ罪

第七節 放火失火ノ罪

第八節 決水ノ罪

第九節 船舶ヲ覆没スル罪

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪

第十二條 合圍地境內ニ裁判所ナク又其管轄裁判所ト通路斷絶

セシ時ハ民事刑事ノ別ナク總テ軍衙ノ裁判ニ屬ス

第十三條 合圍地境內ニ於ケル軍衙ノ裁判ニ對シテハ控訴上告

ヲ爲スコトヲ得ス

第十四條 戒嚴地境內ニ於テハ司令官左ニ記列ノ諸件ヲ執行ス

ルノ權ヲ有ス但其執行ヨリ生スル損害ハ要償スルコトヲ得ス

- 第一 集會若シハ新聞雜誌廣告等ノ時勢ニ妨害アリト認ムル者ヲ停止スルヲ
- 第二 軍需ニ供ス可キ民有ノ諸物品ヲ調査シ又ハ時機ニ依リ其輸出ヲ禁止スルヲ
- 第三 銃砲彈藥兵器火具其他危險ニ涉ル諸物品ヲ所有スル者アル時ハ之ヲ檢査シ時機ニ依リ押收スルヲ
- 第四 郵便電報ヲ開緘シ出入ノ船舶及ヒ諸物品ヲ檢査シ並ニ陸海通路ヲ停止スルヲ
- 第五 戰狀ニ依リ止ムヲ得サル場合ニ於テハ人民ノ動産不動産ヲ破壊燬燒スルヲ
- 第六 合圍地境內ニ於テハ晝夜ノ別ナク人民ノ家屋建造物船舶中ニ立入り檢査スルヲ
- 第七 合圍地境內ニ寄宿スル者アル時ハ時機ニ依リ其地ヲ退去セシムルヲ

第十五條 戒嚴ハ平定ノ後ト雖モ解止ノ布告若クハ宣告ヲ受ク

ルノ日迄ハ其効力ヲ有スル者トス

第十六條 戒嚴解止ノ日ヨリ地方行政事務司法事務及ヒ裁判權ハ總テ其常例ニ復ス

○

△(十四公布第六拾七號)刑法附則別冊ノ通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

刑法附則

○第一章 主刑執行

第一條 死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ典獄刑場ニ立會典獄ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行ス可キヲ告示シタル後押丁チシテ之ヲ執行セシム但其期限ハ午前十時前トス

第二條 死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ
外刑場ニ入ルコトヲ許サス但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限
ニ在ラス

第三條 死刑ノ執行畢リタル時ハ書記其始末書ヲ作り立會ヲ爲
シタル官吏ト共ニ署名捺印シ之ヲ裁判所ノ檢事局ニ納ム可シ

第四條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス
元始祭 孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

仁孝天皇祭

神武天皇祭

六月大祓

秋季皇靈祭

神宮神嘗祭

天長節

後桃園天皇祭

新嘗祭

光格天皇祭

十二月大祓

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ
穩婆ヲシテ之ヲ檢査セシメ果シテ懐胎ナル時ハ檢察官ヨリ司
法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ
命令ヲ受ケ決行スヘシ

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者ア
ル時ハ典獄之ヲ許可シ下付スルコトヲ得

第七條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ典
獄ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルコトヲ得

第八條 死刑ヲ執行シタル時ハ犯人ノ屬籍氏名年齢職業住所及
ヒ其罪狀刑名ヲ記載シテ左ノ各所ニ榜示公告ス可シ

刑ヲ宣告シタル裁判所ノ門前

犯罪ノ地

犯人住居ノ地

△(十五司内第三号裁判所警視廳府縣東京府除ク)處刑ノ者犯由揭示

ノ儀ニ付明治七年五月當省第九号ヲ以テ相達置候旨モ有之
候處今般新刑法實施ニ付テハ明治十四年十二月第六十七号
公布刑法附則第八條ニ據リ自今左ノ通改正候條此旨相達候
事

一死刑ノ宣告アリタルトキハ重罪裁判所書記ニ於テ左ノ雛
形ニ據リ公告按テ製シ三日間該廳門前ニ揭示シ且別ニ宣
告書ノ謄本ヲ製シ犯罪ノ地並犯人住居ノ地方(東京ハ警
視廳)府縣へ速ニ送達スヘシ
一警視廳府縣ニ於テハ重罪裁判所書記ヨリ死刑宣告書ノ謄
本送達アレバ左ノ雛形ニ據リ犯罪ノ地並犯人住居ノ地何
レモ三日間通衢ニ揭示公告スヘシ

死刑宣告揭示公告雛形(略之)

第九條 徒流ノ囚ヲ發遣スルハ裁判ヲ爲シタル地ノ監獄管理長
官ヨリ内務卿ニ上申シ其命令ヲ待テ發船ノ地ニ護送ス可シ

第十條 徒刑ノ囚ハ島地ニ於テ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシム
ルヲ得

第十一條 流刑ノ囚幽閉中獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ
者ハ典獄之ヲ許ス可シ

第十二條 流刑ノ囚幽閉ヲ免ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ内務司
法兩卿ニ上申シ其許可ヲ受ク可シ

第十三條 徒刑ノ囚假出獄ヲ許サレタル者又ハ流刑ノ囚幽閉ヲ
免セラレタル者家屬ヲ招キ同居スルヲ請フ時ハ之ヲ許ス可シ
得但其路費ハ自ラ之ヲ辨ス可シ

第十四條 流刑ノ囚幽閉ヲ免シ地ヲ限り居住セシムル者ハ監獄
近傍ノ地ヲ限リ典獄ノ監督ヲ受ケシム若シ已ムコトヲ得サル事

故アル時ハ典獄ニ請フテ限外ニ出ルヲ得

第十五條 流刑ノ囚關門ヲ免セラレタル者再ヒ罪ヲ犯シタル時

ハ本刑期限内ト雖モ島地ニ於テ直チニ其刑ヲ執行ス可シ

第十六條 懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムル
一ヲ得

第十七條 禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サント請フ
者ハ典獄之ヲ許ス可シ

第十八條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑
期百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第十九條 囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置
スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未ダ納完セサル前ニ於テ犯人
身死スル時ハ之ヲ徵收セス附加ノ罰金ニ於ル亦同シ

○第二章 監視

第二十一條 監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ檢束スル爲メ
警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシムル者トス

第二十二條 〔十五公布第四十〕監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所
ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ最近ノ警察所ニ護送シ

其警察所ヨリ住居ノ地ノ警察所ニ送致シ監視ヲ執行セシム但
主刑ノ期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止タ監視ニ付スル
者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ護送ス可シ

第二十三條 犯人ヲ警察所ニ護送スル時ハ其監視ノ起算滿期ヲ
記載シタル文書及ヒ刑名宣告書ノ謄本ヲ附ス可シ

△〔十五司内第八號大審院裁判所警視廳府縣東京府〕處刑宣告ノ
後犯人ヲ司獄官へ護送セシムル際ニ於テハ監獄則ニ從ヒ檢
察官ヨリ右宣告書ノ謄本ヲ司獄官へ送達スル義ト心得ヘシ

此行相達候事

第二十四條 (十五公布總四十)

第二十五條

警察所ヨリ犯人ヲ住居ノ地ノ警察所ニ送致スル時ハ其里程ヲ計リ日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與シ犯人到着ノ日直ニ之ヲ其地ノ警察所ニ差出サシム但途中事故アリテ淹滞シタル時ハ第三十一條ノ例ニ從フ可シ

犯人ヲ送致スル時ハ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ其地ノ警察所ニ遞送ス可シ

△(十五内乙第十九號警視廳府縣東京府刑法附則中監視票旅券

共別紙書式之通相定候條各廳ニ於テ調製シ下附スヘシ此旨

相達候

但紙質堅緻ナルモノヲ用フベシ(別紙書式畧之)

△(十五内乙第三十一號府縣)本年當省乙第十九號達刑法附則第

二十五條ニ依リ附與スル旅券第四項ノ但書ハ特別監視ニ附

セラレタル者ニ限り挿入シ尋常監視ニ附セラレタル者ニ挿

入セス及ヒ監視票並ニ旅券ニ警察署トアルハ警察分署ヲモ

包含セル義ト心得ヘシ此旨更ニ相達候

第二十六條 犯人住居ノ地ノ警察所ニ於テハ監視ノ期間間遵守

ス可キ條件ヲ讀聞カセ監視ノ票ヲ下付ス可シ

第二十七條 監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ遵守

ス可シ

一 毎月二度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルヲ表シ監視ノ

票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ已ムヲ得サ

ル事故アリテ警察所ニ到ルコト能ハサル時ハ其事由テ届出

ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルコトヲ許サ

ス

三 事故アリテ其住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

四 擅ニ他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許カス若シ已ムコトヲ得ザル事故アル時ハ其事由ヲ警察所ニ具申シ許可ヲ受ク可シ

第二十八條 監視ノ期間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ臨檢スルコトアル可シ

第二十九條 警察所ニ於テ住居ヲ轉スルコトヲ許可シタル時ハ其事由ヲ轉住ノ地ノ警察所ニ通知シ第二十三條ニ記載シタル書類ヲ遞送ス可シ

第三十條 他ノ地方ニ旅行スルコトヲ許可シタル時ハ其里程ヲ計リ先方ノ地ニ滞留スル時日ヲ算シ往復日數ヲ限定シテ旅券ヲ付與ス可シ

犯人先方ノ地ニ到レハ其地ノ警察所ニ出テ旅券ヲ示シ官吏ノ認印ヲ受ケ限定ノ日數内ニ歸來リ直チニ旅券ヲ警察所ニ還納ス可シ

第三十一條 旅行中天災又ハ疾病等ニ因リ臨時淹滞シタル時ハ事由ヲ其地ノ警察所ニ具申シ官吏ノ證書ヲ受ケ歸着ノ日旅券ニ添ヘ警察所ニ差出ス可シ

第三十二條 監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間監獄中ノ別房ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者亦同シ

第三十三條 監獄中ノ別房ニ留置シタル者限内引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條 刑期限内再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付ス可

キ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付ス可キ時ハ並ニ主刑満限ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條 罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三十六條 監視ニ付セラレタル者其規則ヲ遵守シ悛改ノ狀アル時ハ警察官ヨリ其實情ヲ上申シ内務司法兩卿ノ命ヲ受ケテ假ニ監視ヲ免スルコトヲ得

第三十七條 假ニ監視ヲ免セラレタル者住居ヲ轉移スル時ハ第二十七條第三及ヒ第二十九條ノ例ニ從フ可シ

○第三章 假出獄及ヒ特別監視

第三十八條 假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレシトシ内務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條 假出獄ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票ヲ犯人ニ下付ス可シ

第四十條 假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 本人ノ屬籍氏名年齢住所罪名刑名及ヒ處刑ノ年月日
 - 二 殘期何年月何日間假出獄ヲ許ス事
 - 三 假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事
 - 四 假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事
- 第四十一條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者假出獄中自ラ財産ヲ治メ若クハ職業ヲ營マントスル時ハ警察所ニ申請シ許可ヲ受ク可シ

第四十二條 (十五公布第四十二) 假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其號ヲ以テ改正スル 住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添へ第二十

二條ノ例ニ依リ犯人ヲ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ

第四十三條 特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二

十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十四條 特別監視ニ付セラレタル者ハ其期限間左ノ條件ヲ

遵守ス可シ

一 毎週間一度所轄ノ警察所ニ到リ其謹慎ナルヲ表シ監視

ノ票ヲ出シ官吏ノ認印ヲ受ク可シ但疾病又ハ己ムヲ得

サル事故アリテ警察所ニ到ルヲ能ハサル時ハ其事由ヲ届

出ツ可シ

二 酒宴遊興ノ席ニ會シ又ハ群集ノ場所ニ參會スルヲ許サ

ス

三 事故アリテ住居ヲ轉移セントスル時ハ警察所ニ申請シ許

可ヲ受ク可シ但他ノ府縣ニ轉移スルヲ許サス

四 往復一日程ヲ過シル地ニ旅行スルヲ許サス

第四十五條 特別監視ノ期限間ハ警察官吏時宜ニ因リ其家宅ニ

臨檢スルヲアル可シ

第四十六條 假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出

獄證票ヲ警察所ニ還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル典獄ニ遞

送ス可シ

主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察所ニ於テ第二

章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條 假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒ引取人ナキ時ハ

第三十二條ノ例ニ從ヒ監獄中ノ別房ニ留置ス可シ

○第四章 刑事裁判費用

第四十八條 豫審公判ニ付キ呼出シタル證人醫師鑑定人通辨人

翻譯人ニ給與ス可キ日當旅費止宿料及ヒ第五十一條第五十二

條ニ記載シタル者ヲ以テ刑事ノ裁判費用ト爲ス

第四十九條 日常旅費及ヒ止宿料ノ金額左ノ如シ

日常五拾錢

旅費一里拾錢

止宿料一宿貳拾五錢

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ給シ及ヒ呼出ノ地ニ
滞在中ハ日常並ニ止宿料ヲ給ス其三里未滿ノ地ニ在ル者ハ旅
費止宿料ヲ給セス

第五十條 證人ノ日常旅費及ヒ止宿料ハ本人ノ請求アルニ非サ
ソハ之ヲ給與セス

第五十一條 證人日稼ヲ以テ生業トスル者治罪法第九十條ニ
從ヒ償金ヲ要求スル時ハ旅費日常ノ外若干ノ償金ヲ給スルコ
アル可シ

第五十二條 解官刑罰ノ費用及ヒ其ノ賠償ノ費用ハ其ノ
ノ類ハ日常ノ刑罰ノ之ヲ給與ス

第五十三條 裁判費用ノ宣告ヲ受ケ未タ之ヲ給メサル前ニ於テ
犯人身死スル時ハ其相續人ヨリ之ヲ徵收ス

○第五章 賠償處分

第五十四條 贖物犯人ノ手ニ在ル時ハ直チニ被害者ニ還付スト
雖モ若シ輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求ニ因リ還
給セシムル者トス

第五十五條 贖物輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時公商ニ由リ買取シ
タル物品ハ其公商若シハ被害者ヨリ買取者ニ原價ヲ償ハサレ
ハ直チニ還給セシムルコトヲ得ス

若シ公商ニ由ラスシテ買取シタル物品ハ其還給ヲ拒ムコトヲ得
ス但其買取者ハ賣者ニ對シ轉價ヲ求ムルコトヲ得

第五十六條 贖物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取タル者其贖物現在

スル時ハ還給ヲ拒ムコトヲ得ス但典物トシテ受取タル者ハ典主
ニ對シ轉債ヲ求ムルコトヲ得

第五十七條 贖物交換シテ現在スル時ハ公商ニ由ルト否トテ區
別シ第五十五條ノ例ニ從テ處分ス可シ

第五十八條 贖物已ニ費用シタル時又ハ識別ス可カラサル時又
ハ其所在ノ知レサル時ハ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第五十九條 人ノ名譽若クハ殺傷ニ關シタル損害其他犯罪ノ爲
メ現ニ生シタル損害ハ其賠償ヲ請求スルコトヲ得但夫火ハ此限
ニ在ラス

第六十條 贖物ノ還給損害ノ賠償ハ其犯罪ヲ審判スル刑事裁判
所ニ請求スルコトヲ得若シ其審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所
ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十一條 刑事裁判所ニ於テ贖物ノ還給損害ノ賠償ヲ請求ス
ル者ハ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其民事裁判
所ニ請求スル者ハ民事訴訟ノ程式ニ從フ可シ

第六十二條 贖物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人
ニ對シ之ヲ要求スルコトヲ得

第六十三條 贖物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠
償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請
求スルコトヲ得

治罪法

○第一編 總則

第一條 為訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ

第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贖物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズニ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サ、ル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲ス可キ得

第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律

ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

△(十四公布第八十二號)大審院各裁判所ニ於テ明治十四年十二

月三十一日以前審理ニ著手セシ刑事ハ十五年一月一日以後

ト雖モ治罪法ニ拘ハラス仍ホ從前ノ規則ニ從ヒ處分スヘシ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴

私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラズ

若賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效

ナカル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ

非サレハ陛下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲ス可キ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ陛下ヲ

爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲ス可キ得

第八條 被告人免許又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從

ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私

和

三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五 大赦

六 期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三 期滿免際

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

- 一 違警罪ハ六月
- 二 輕罪ハ三年
- 三 重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フ

第十三條 公訴私訴期滿免除ノ期限ハ犯罪ノ日ヨリ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十四條 期滿免除ハ刑事裁判所ニ於テ檢察官若クハ民事原告人ヨリ起訴ノ手續ヲ爲シ又豫審若クハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル時ハ起訴豫審又ハ公判ノ手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期限ヲ起算ス但前後ノ日數ヲ通算シテ第十一條ニ定メタル期限ノ二倍ヲ超過ス可カラズ

第十五條 起訴豫審又ハ公判ノ手續其規則ニ背キタルニ因リ無効ニ屬スル時ハ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スルノ效ナカル可シ但裁判官ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル時ハ此限ニ在ラス

第十六條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重キ過

失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得
被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告
人ヨリ惡意若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ
爲シタル時亦同シ

民事原告人豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル
時ハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得
要償ノ訴ハ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之
ヲ爲スコトヲ得

第十七條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ裁判官檢察官書
記又ハ司法警察官ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官
吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪
ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十八條 此法律ニ於テ期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル者ハ即
時ヨリ起算シ日ヲ以テスル者ハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日
休暇ニ當ル時ハ期限ニ算入ス可カラズ但期限免除ノ期限ハ此
限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以
テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫
ヲ加フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ

島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

△(十五公布第七號)治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸

路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過
シタル時ハ特別ノ場合ヲ除クノ外其權ヲ失フ可シ

第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其地

ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ヲサル時ハ書類ノ送達
ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ
別ニ規則アラサル時ハ書記其送達書ヲ作り書記局所屬ノ使丁
ヲシテ之ヲ送達セシム

若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其
地ノ裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ屬託ス可シ

△(十四司丁第二十六號)使丁規則別冊之通相定候條明治十五年
一月一日ヨリ施行スヘク此旨相達候事

使丁規則

第一條 各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書
類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トス

使丁取締ハ壹人トス但場所ニ因リ貳人以上ヲ命スルコトア

ルヘシ

第二條 使丁ハ使丁取締之ヲ撰ヒ其氏名ヲ書記局ニ届出鑑
札ヲ受ルモノトス

使丁ノ人員ハ使丁取締適宜之ヲ定メ書記局ノ許可ヲ受ク
可シ

第三條 使丁取締ハ送達ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノト
ス

第四條 使丁取締ハ常ニ裁判所ニ在テ送達ノ事ヲ取扱フ可
シ

第五條 使丁ハ送達ヲ爲ス時裁判所ノ鑑札ヲ帶行ス可シ

第六條 送達ヲ爲スニハ其法律規則ニ從フ可シ

第七條 使丁取締及ヒ使丁ハ訴訟ニ付代人トナリテ訟廷ニ
出ルコトヲ許サス

第八條 送達ノ事ニ關シ他人ニ損害ヲ被ラザメタル時ハ使

丁取締其償ヲ擔當ス可シ

但使丁ノ過失懈怠ニ由ル時使丁取締ハ之ニ對シ更ニ其償ヲ求ムルコトヲ得

第九條 送達賃錢ハ書類ノ大小ニ拘ハラヌ一通ニ付一里五錢以下トス

賃錢ノ定限ハ使丁取締之ヲ申立書記局之ヲ決シ且送達書ニ其賃錢高ヲ附記ス可シ

第十條 賃錢ノ定限ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ掲載シ又其他ノ方法ヲ以テ公告ス可シ

第十一條 刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受ルモノヨリ之ヲ拂仕シ可シ

但左ノ場合ニ於テハ書記局ヨリ之ヲ拂仕リ可シ

一 檢察官又ハ裁判官ヨリ呼出ス証人鑑定人通事ノ呼出狀

二 檢察官ノ控訴申立ヲ被告人ヘノ通知及ヒ呼出狀

三 檢察官ヨリ被告人ヘ送達スル上告申立書及ヒ趣意書

第十二條 刑事附帶ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃錢ハ總

テ其送達ヲ請求スル者ヨリ之ヲ拂フ可シ

第十三條 送達賃錢ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタル裁判所ニ之ヲ爲ス可ヘシ

第十四條 使丁取締ハ書類送達ヲ正實ニ取扱フ可キ旨ノ書面ヲ書記局ニ差出ス可シ

第十五條 使丁取締及使丁此規則ニ違背シタル時裁判所書

〇百五

記局ハ使丁取締ニ左ノ條件中ニテ相當ノ言渡ヲ爲スヘシ

一 貳拾圓以下ノ違約金ヲ納メシムル事

二 解職セシムル事

三 事情重キ者ハ違約金ヲ納メ解職セシムル事

第十六條 使丁取締タルニハ其ノ裁判所々在地ニ家屋ヲ有

シ滿二十一歳以上ノ者ニシテ書記局ノ試験ヲ經ルコトヲ要

ス

使丁取締タルニハ身元保証トシテ金五拾圓以上ノ價格ア

ル公債証書地券又ハ銀行其他官許アル株券証書ヲ書記局

ニ納ム可シ

但此保証金ハ解職ノ時下戻ス可シ

第十七條 試験ハ書記貳名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

但書記不足ナルトキハ雇ヲ以テ之ニ充ツ可シ

試験ノ科目ハ左ノ如シ

一 使丁規則

二 請負郡村ノ地名又ハ里數

三 普通書簡ノ書讀

第十八條 實決ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ身代限リノ處分

ヲ受ケ未タ辨償ヲ終ラサル者ハ使丁取締又ハ使丁タルコ

ト許サス

△(十五)司丁第三十四號大審院裁判所(明治十四年丁第二十六号

ヲ以テ相達置候使丁規則第九條並ニ第十一條左ノ通り改正

候條此旨相達候事

第九條 送達賃錢ハ地方ノ便否ニ從ヒ書記局ニ於テ適宜其

定限ヲ立ツ可シ

但送達書ニ賃錢ノ高ヲ附記ス可シ

第十一條 刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受ル者ヨリ之

ヲ拂フ可シ

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スコトヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ

送達人ハ之ヲ受取リタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スコトヲ得ス若シハ是等ノ者之ヲ受取ルコトヲ肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ

送達人ハ書類ヲ受取リタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載ス可シ

本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ效ナカラン可シ

送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ之ヲ保存ス可シ

第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ效ナカラン可シ但本人承諾シテ其送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラズ

△(十四公布第四拾六號一項)書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候得共當分ノ内ハ不及其儀候事

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ母印ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカラン可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作りタル場合ヲ除クノ外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

△(十四司丙第十六號大審院裁判所警視廳府廳)東京府(治罪法中)除ク

犯人証人等押印ノ條々實印無之者ニ限り從來ノ慣例ニ依リ
捺印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相違候事

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ正本又
ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ
欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ
讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル
時ハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則
ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス
頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效
アリトス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又
ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但シ其法律ニ懸

關スル規則ハ此限ニ在ラス

從前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メ
タル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分スヘキ者
ニ適用スルヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十
五條ノ例ニ從フ

○第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

○第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所
ニ屬ス

△(十四公布第八十三號)治安裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限左ノ

通制定ス

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニ在ラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ル可カラサルモノヲ裁判スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上並ニ第三條ニ掲ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ス

但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布告控訴手續ニ照準スルニシ

△(十五公布第五號)明治十四年十二月第八十三號ヲ以テ民事裁判權限ノ儀布告候處當分ノ内西郷和川豐岡洲本田邊脇町高山平戸福江嚴原天草大曲八戸大島治安裁判所ニ於テ民事ノ訴訟ハ始審裁判所ノ權限ヲ以テ裁判スルニシ

但請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ件ニ關スル控訴ハ管轄始審裁判所ニ之ヲ爲スルニシ

△(十五司丁第十號控訴裁判所始審裁判所)客年第八十三號布告ヲ以テ治安裁判所及始審裁判所ノ權限相定メラレ候付テハ治安裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ハ始審裁判所ニ於テ受理スルニシハ勿論ニ候處右布告ヲ知り得サル前ニ於テ舊區裁判所若シハ治安裁判所ノ裁判ニシテ始審裁判所ニ控訴スルニシ

ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スル者ハ控訴裁判所ニ於テ之ヲ受理シ管轄始審裁判所ニ引繼クヘキ儀ト心得ヘシ此旨爲念相違候事

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ定ム

△(十四公布第五十三號)各裁判所ノ位置及管轄ノ區劃別表ノ通改正シ明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事(別表略ス)

△(十四公布第五十六號)小笠原島裁判所事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所 即チ違警 罪裁判所 始審裁判所 即チ輕罪ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事
但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

△(十四公布第五十七號)伊豆七島裁判所事務當分該島吏へ民事ハ百圓以下及勸解並ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事
但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

△(十四公布第七十八號)本年十月第五十三號布告裁判所名稱區劃表始審ノ行中相川豐岡洲本田邊脇町高山西郷平戸福江嚴原天草大曲八戸ノ名稱ヲ削除シ其管轄ハ相川ヲ新瀉ニ豐岡ヲ姫路ニ洲本ヲ神戸ニ田邊ヲ和歌山ニ脇町ヲ德島ニ高山ヲ岐阜ニ西郷ヲ松江ニ平戸福江嚴原ヲ長崎ニ天草ヲ熊本ニ大曲ヲ秋田ニ八戸ヲ弘前ニ合併ス

△(十四公布第七十八號)重罪裁判所管轄區畫別紙之通相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

但治罪法第七十二條ニ從ヒ管内便宜ノ裁判所ニ於テ一ヶ所又ハ數ヶ所開廳スヘシ(別紙零ス)

△(十四公布第七十九號)各裁判所ノ位置及管轄區畫ノ儀本年十月第五十三號ヲ以テ布告候處北海道函館始審裁判並ニ沖繩縣ノ儀ハ當分従前ノ通其所轄ノ官廳ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜ノ取計ヲ爲スヘシ

但控訴ノ儀北海道ハ函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所ノ管轄ニ屬ス

△(十五公布第二十九號)明治十四年十二月第七十八號布告重罪裁判所管轄區畫中左ノ通改正ス

函館重罪裁判所管轄内
函館ノ下ニ札幌根室ノ四字ヲ加ヘ開拓使札幌根室本支廳管轄ノ地方トアル一行ヲ刪ル

△(十五公布第十四號)舊開拓使官廳ニ於テ取扱來候裁判事務ハ自今司法裁判所ヲ置キ之ヲ管理セシム

但裁判所ノ位置管轄及ヒ權限等追テ布告候迄従前ノ通タルヘシ

△(十五公布第十六號)樺戶集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

△(十五公布第三十三號)明治十四年十二月第七十八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處沖繩縣管内重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ内同縣ニ於テ審訊シ證據擬律按テ具ヘ長崎控訴裁判所ノ許可ヲ得テ後宣告スヘシ治罪ノ手續ハ便宜ノ取計ヲ爲スコトヲ得

△(十四司丁第十六號大審院諸裁判所裁判所)順次別紙ノ通相達候事(別紙略ス)

△(十五公布第二十八號)明治十四年(十月)第五十三號布告各裁判所位置管轄區畫表中函館控訴裁判所管轄内開拓使トアルヲ函館縣ト改メ同裁判所管轄内左ノ通追加ス(改正表略ス)

△(十五公布第三十號)札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取計且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證據據律按テ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ

△(十五司丁第三號控訴裁判所始審裁判所)人民ヨリ官府ニ對スル調訟ノ受否又ハ判決見込ニ付現今伺出ニ係ル件中客年第五十三號布告ニ依リ他ノ管轄裁判所ニ屬スヘキ分ハ當省ヨリ直ニ其管轄裁判所ニ移シ處分セシメ候條此旨相達候事
△(十五公布第四十一號)空知集治監ノ囚人(假出獄免問ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ

治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

第三十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第三十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ヲ捜査ス

二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第三十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フヘシ

第三十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第三十七條 書記ハ豫符及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他

訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ作ルヘシ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第三十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルノ左ノ如シ

一 違警罪ハ違警罪裁判所

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三 重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

△(十五司内第二十一號大審院裁判所警視廳府縣東京府東京憲兵本部)被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相違候事

第三十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カス爲メ他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

△(十四公布第四十二號二項)治罪法第四拾條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シ

テ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所
ヲ以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人
ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所
ニ送致ス可シ

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕
スルコト能ハス若シハ法律上逮捕ズルコト許サレタル時ハ其中ニ
テ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
第四十四條 逮捕ニ從ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリト
ス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初

豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メ

タル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條 外國ニ在テ犯罪シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス

ルキ者ニシテ其地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ
裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致
ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

關席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判
所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ
定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法
律ヲ以テ之ヲ定ム

△(十四公布第六十五號)商船内犯罪取扱規則別紙ノ通制定ス

商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪ニルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且証憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テテハ立會人二名以上アルヲ要ス
第三條 船長ハ證據及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄

ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ豫審又シテ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルコトヲ得

△(十四司丁第十八號)書記局其他訟廷等ノ心得書別紙ノ通相達候事

書記局其他訟廷等ノ掌務心得書

第一條 書記局諸般ノ事務ハ各員輪轉之ヲ執リ豫メ其主掌

ヲ定メス

第二條 訟廷ノ取締被告人扣所ノ看守ハ巡查獄卒等ヲシテ
之ヲ掌ラシムヘシ

第三條 訴訟口詰ハ雇員ヲ以テ之ニ充テ訴訟人呼入其他訟
廷ニ關スル雜事ノ使用ハ小使ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第四條 門候ヲ置クト否トハ其廳ノ便宜ニ任ス若シ之ヲ置
クトキハ雇員又ハ小使ヲ以テ之ヲ掌ラシムヘシ

但東京各裁判所ハ此限ニ非ラス

第五條 宿直ハ等外吏員雇員等ニテ之ヲ務メシメ在宅當番
(退廳後ヲ云フ)ハ判任官ニテ順次之ヲ務メシムヘシ

但東京各裁判所ハ此限ニ非ラス

△(十四公達第八十六號)警視廳府縣東京府神繩治罪法實施ニ付
テハ大審院其他各裁判所公庭取締ノ使用ニ供スルコト其院

長所長ノ照會ニ應ジ壹名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被告
人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシテ公庭ニ
入り看護セシムヘシ此旨相達候事

○第二章 違警罪裁判所

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於
テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

△(十四公布第四十八號)刑法治罪法中違警罪裁判ノ儀ハ當分三
府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判
可致候條此旨布告候事

△(十四公布第八十號)本年九月第四十八號布告左之通改正ス
違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年一月一
日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ内府縣警察署
及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ

△(十四第六八九〇號三好司法大書記官ヨリ通牒)違警罪裁判ノ儀ハ本年第四十八號ヲ以テ府縣警察署又ハ警察分署ニ於テ裁判可致旨御布告相成候得共違警罪ヨリ生スル私訴ハ該公布外ナルヲ以テ相當民事裁判所へ訴出へキハ無論ニ候得共此段爲念及御通牒置候也

△(十四司丙第十二號警視廳府縣東京府沖繩縣ヲ除ク)今般第四十八號ヲ以テ違警罪裁判ハ當分三府五港市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニ於テ裁判可致旨御布告相成候ニ付テハ各警察署並ニ警察分署所在名稱及ヒ管轄區畫左之雜形通取調可届出此旨相達候事

何警察署
何區何町何村
何警察署何分署
管轄
全前
全全全

△(十四公第五十四號)刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分

ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セス、見込ムモノニ限リ始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟庭内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

△(十四公布第七十一號)治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時

ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

△(十四公布第七十七號)本年十月第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサルモノニ限リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヘキ旨布告候處當分ノ内相川豐岡洲本田邊脇町高山西郷平戶福江巖原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ

但本文ノ場合ニ於テ訟庭内治罪ノ手續等ハ本年第五十四

號布告但書ノ通タルヘシ

△(十四司丁第二十七號)本年第五十四號公布ニ依リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クハ其管轄輕罪裁判所ノ名稱ヲ用ヒ其印ヲ捺シ某治安裁判所ニ於テスルヲ附記スヘシ左ニ離形相添ヘ此旨相達候事(離形略之)

△(十五司内第二十七號)裁判所府縣東京府檢事補兼任ノ警部職務上需用ノ物品筆墨紙等ノ類本務兼務ノ所用ニ拘ラス現時出勤之應ヨリ供給スル義ト心得可シ此旨相達候事

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所所在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作

リ輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

△(十四司丙第十九號)警視廳府縣東京府警察署ニ於テ審判シタル違警罪事件表並既決犯罪表別紙様式ニ照準シテ調成スヘシ尤違警罪事件表ハ治罪法第五十二條ニ從ヒ差出ス儀ト可心得此旨相達候事(別紙略ス)

(檢察官意見アルトハ表末ニ記載スヘシ但シ長文ニ涉ルキハ別紙ニ記スルモ可ナリ左ニ一ニノ文例ヲ示ス

犯罪事件前表ニ比スレハ若干ノ増加アルハ近來管内ニ某事業興起シタルニ因リ人口幅糞スルニ原由セリト思考ス」又ハ犯罪事件斯ク増加スト雖モ過半ハ何々ノ一ニ關スル犯罪ナルヲ以テ久シカラスシテ常ニ復スヘシト思考ス

又ハ何月以來未決事件ノ増加セシハ係リ官員疾病或ハ何
々ニ因リ何月以來事務ヲ執ルノ能ハサルニ由ル
又ハ事件ノ減少スルハ何々ニ原由セリ因テ久シカラス
テ増加ヲ見ルニ至ル可シト思考ス
署長意見アラハ亦前文ニ準ス

△(十四司丁第三十四號)治罪法第五十二條第六十八條第七十六
條第八十二條第四百六十四條表式別紙之通相定候條右ニ照
準シテ調成スヘシ此旨相違候事(別紙畧ス)

但明治十年丙第十七號違犯罪未決件數表丁第六十二號違
犯罪糾問表ハ來ル十五年一月一日ヨリ廢止候事

△(十五司丙第壹號警視廳府縣東京府)今般刑法治罪法實施ニ付
テハ今後刑事裁判統計表ノ材料ニ供候間別紙表式及書例ニ
準シ毎年一月一日ヨリ十一月三十一日マテニ違警罪事件ヲ

記載シ翌年二月マテニ取纏メ差出ス可ク候條此段相違候事
(別表畧之)

違警罪裁判所

公判第一表(此表ハ違警罪ノ公判ニ係ル件數及人員ヲ
記載スル者トス)

第一欄 此欄ニハ刑法第四百二十五條以下ノ各項ニ從テ犯
罪ノ性質ヲ詳カニ記載スル者トス此他各地方ノ便宜ニヨ
リ定ル所ノ違警罪モ亦實際ノ罪狀ヲ詳明ニ記載スルコトヲ
要ス已下各表中犯罪ノ性質ヲ記スヘキ欄ハ皆之ニ倣ヘシ
但初メニ男ノ罪狀ヲ條列シ次ニ女ノ罪狀ニ及フヘシ

第二欄 此欄ニハ表目ノ如ク一項ニ前年ヨリ越高ノ件數ア
レハ之ヲ記シ本年受理ノ件中一節ハ治罪法第三百二十項
ニ係ル者ニシテ二節已下同條二項ヲ區分シテ記載スル者ナ

第三欄 此欄ニハ前年殘件中ノ人員ト本年受理中ノ人員ト
ヲ區分記載スヘシ

第四欄 此欄ニ對密ト缺席裁判トノ人員ヲ區分記載スヘシ

第五欄 此欄ニモ亦書例ヲ舉ル如ク裁判言渡ニ從テ被告人
員ヲ記載スヘシ

附帶ノ私訴ノ公判表〔此表ハ損害ノ賠償ニ係ル要求ノ
件數ヲ記載スル者トス〕

第一欄 此欄ニハ請求者ノ申立ニ從ヒテ第一表欄内ノ例ニ
依リ其要求ノ原由タル犯罪ノ性質ヲ掲グル者トス即チ要
求ノ員數ト要求ノ金額トニ從テ條列ス若シ同一ノ犯罪ニ
就テノ要求ニシテ件數ヲ別ツヘキ者若シハ同一ノ件數ニシ
テ請求者二人已上アリ其要償ノ金額ニ差違アリテ其言渡ヲ

異ニスルノ類ハ其區別ニ從テ逐項ニ同式ハ同前ト記スヘ
シ

第二欄 此欄ノ舊受トハ前年ノ殘件新受トハ本年ノ新件ニ
シテ此區別ニ從テ件數ヲ掲グル者トス即チ上欄ノ事由ニ
從テ記載スヘシ同一ノ件ニシテ請求者二人以上ノ類ハ最
初ノ者チ一ト記シ次ヨリ前チ承ケテ同ト逐次ニ記シ上欄
各項ニ照シ其件數ヲ列載ス總テ同一ノ件ト各別ノ件ト混
雜セサル様注意スヘシ

第三欄 此欄ニモ亦上欄各條ニ照シ請求ノ金額ヲ記載スル
者トス若シ前條ト金額チ同フスル者アル時ハ同書スルモ
妨ケナシ

第四欄 此欄ニハ言渡ノ金額ヲ記載スル者トス誤テ要求ノ
金額ト混ス可ラス却下ノ項ハ請求ノ理由ナクシテ却下セ

シ類ヲ記載スヘシ願下ノ項ハ被害者ノ棄權若クハ私和シ願下ケタル類ヲ記載スヘシ

第五欄 此欄ニハ十二月三十一日取調中ニシテ翌年ニ越スヘキ者アレハ其件數ヲ記スヘシ(別表附之)

△(十五司丙第二十九號警視廳府縣東京府本年當省丙第一號達達警罪公判第一表第二欄書例ナ除クへ左ノ通但書追加候條此旨相達候事

但女ノ件數中前條男ノ件ト同一ニシテ前後再出スル者ハ女ノ件數各項内ニ於テ重複數ヲ朱書スヘシ假令ハ女ノ各條中六十件アリ前ノ男ト同一ノ件十三アレハ〔四一〕ノ如ク書シ合計迄各項皆同シ

△(十五司丙第二號警視廳府縣東京府本年丙第一號ヲ以テ相達候達警罪各表式ノ欄外ニ何達警罪裁判所ト記載アリト雖當

分ノ内左ノ書例ニ據リ記スル者ト可心得此旨相達候事

達警罪公判表欄外ノ廳名ハ姑ク左ノ例ニ據ルヘシ

何府縣

何警察署

又ハ

何府縣

何警察分署

△(十五司丙第二十三號裁判所警視廳府縣東京府昨十四年丙第十九號丁第三十四號達達中自今達警罪事件ハ三通ヲ差出シ輕罪裁判所檢事ハ其一通ヲ備管ニ通シ差出シ控訴裁判所檢事長ハ又其一通ヲ備置豫審及輕罪事件表ハ二通ヲ差出シ控訴裁判所檢事長ハ亦其一通ヲ備置谷一通ヲ本省へ差出ス可シ此旨相達候事

△(十五司丁第八號大審院裁判所) 明治十四年丁第三十四號達治罪法表式第四号輕罪既決未決事件表裏面治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キタルハ云ルトアルヲ左ノ如ク改正シ及ヒ左ノ表式ヲ増補候條此旨相違候事

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キタルハ本表ニ準シ其裁判所所在ノ警部之ヲ調成シ管轄ノ輕罪裁判所檢事ニ差出シ輕罪裁判所ノ檢事ハ之ヲ取纏メ左ノ表式ニ準シテ更ニ調成シ管轄ノ控訴裁判所檢事長ニ差出スヘシ(表式畧之)

△(十五司丁第十三號大審院裁判所) 明治十四年第八十二號布告ニ依リ處分セシ刑事件數ハ既決未決事件表中ニ記載難致義モ可有之ニ付左ノ書式ニ準シ表末或ハ別紙ニ記載ス可シ此旨相違候事

十四年十二月殘件

何件

内 既濟
未濟

何件
何件

糺問件數及ヒ大審院ノ死罪按件數控訴裁判所ノ懲役終身按件數等ハ本文ニ準シ各別ニ掲クヘシ

△(十五司丁第四十八號大審院裁判所) 本年丁第八號ヲ以テ相違候昨十四年丁第三十四號達治罪法表式第四號輕罪已決未決事件表裏面改正文中ヘ左ノ通但書追加候條此旨相違候事

但昨十四年第七十七號公布ニ依リ總テノ輕罪ヲ裁判スヘ

キ各治安裁判所ノ豫審表モ此例ニ準スヘシ

△(十五司丁第二十九號警視廳府縣^{東京府}ナ除ク) 本年當省第一號達達警罪公判第一表第二欄書例ヘ左ノ通但書追加候條此旨相違候事

但女件ノ數中前條男ノ件ト同一ニシテ前後再出スル者ハ

女ノ件數各項内ニ於テ重複數ヲ朱書スヘシ假令ハ女ノ各條中六十件アリ前ノ男ト同一ノ件十三アレハ(四七)朱書(二三)ノ如ク書シ合計迄各項皆同シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

○第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス

第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名

又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ

判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得

第五十八條 輕罪裁判所檢察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕 裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

一 警視警部

二 區長郡長

三 治安判事

四 警部ノ在ラサル地ノ戶長

△(十四司甲第五號)新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ

巡査ヲシテ警部ノ代理ヲ爲サシムル儀モ可有之候條此旨布

達候事

△(十四司丙第十三號)警視廳府縣(東京府ヲ除ク)新法實施ノ後ハ司法警

察事務上時宜ニ依リ不得止場合ニ於テハ巡査ヲシテ警部ノ

代理ヲ爲サシメ不苦候條此旨相達候事

但代理ヲ命スヘキ巡査ノ姓名ハ豫シメ其地方官報並違警

罪裁判所へ通牒致シ置候義ト心得ヘシ

△(十五公布第二十三號)憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校

下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡査ト同シク司法警察ノ事ヲ行

ハシム

第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢

察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證據其

他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルコトア

ル可シ

第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表

ヲ作り控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長

ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

△(十五)司丁第三十一號大審院諸裁判所(明治十一年丁第二十号及二十一号達中刑事訴訟表雜形並記載例ヲ廢シ更ニ別冊ノ通刑事裁判統計材料表式並書例相定候條本年分ヨリ右ニ準シ其應ニ於テ取扱タル事件ヲ記載シ翌年三月限り差出スヘシ此旨相達候事

但大審院各表ハ裁判所ニ附セス治安裁判所ニ於テ輕罪各表ヲ調成シタル時ハ所轄ノ始審裁判所ニ於テ之ヲ取纏メ共ニ差出スヘシ(別紙各表書例ハ畧ス)

△(十五)司丁第三十二号大審院諸裁判所(明治十一年丙第十一号達相廢シ更ニ別冊ノ通刑事裁判統計材料中特赦表式並書例相定候條本年分ヨリ右ニ準シ特赦事件ハ監獄長ヨリ申立ノ者ニ至ル迄總テ調成シ翌年三月迄ニ差出スヘシ此旨相達候事(別紙表式ハ畧ス)

○第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

△(十四)公布第七十四號(治罪法中刑事ノ控訴ニ關スル條件ハ當分ノ内實施セス

第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム

裁判所長ハ何時ニテモ裁判長ト爲ルヲ得

第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名

シタル檢事之ヲ行フ

第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルヲ得

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルヲアル可シ

檢事長ハ其管轄地内ノ檢察官及ヒ司法警察官ヲ監督ス

第六十八條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

○第五章 重罪裁判所

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

若シ事件夥多ナル時ハ控訴裁判所長及ヒ檢事長ヨリ司法卿ニ具申シ其許可ヲ得テ臨時開廳スルヲ得

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

△(十五)司丁第十一號控訴裁判所始審裁判所 控訴裁判所 在地ヲ除ク 重罪裁判所印章左ノ離形ノ通相定候條該裁判所開設ノ地方所在

(控訴始審)裁判所ニ於テ調製シ常ニ備置候様可致此旨相達候事

但調製ノ上ハ印鑑ヲ以テ可届出候事 (印章離形畧ス)

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長壹名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事ニテ之ヲ命ス

二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

△(十四公布第四十六號三項)治罪法第七拾三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候得共當分ノ内貳名ト相定候事

△(十四公布第五十五號)治罪法第七十三條未文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢察所長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ檢察所長

ヨリ始審裁判所檢事ヲシテ其職務ヲ行ハシムルヲ得

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢察所長ハ開廳ノ後既決事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ控訴裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

○第六章 大審院

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

- 一 上告
- 二 再審ノ訴
- 三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
- 四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可カラズ

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢察長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作り司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

○第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載

シタル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

前二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス

其院ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開

シ其裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ

定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長壹名陪席裁判官六名但元老院議員大審院判事中ニ

リ毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二 豫備裁判官貳名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁以テ大審院刑事局判事壹名

又ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿
ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條
件ニ於テハ其院ニ上訴スルコトヲ得

一 闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ

新ニ職員ヲ命スルコトアル可シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

○第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

○第一章 查

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原
由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ
其証憑及ヒ犯人ヲ捜査シ第百七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手
續ヲ爲ス可シ

△(四十二百三十號)司法卿ヨリ大審院警視廳府縣へ訓示

司法警察官檢察官ニ於テ犯罪捜査ノ手續ヲ尽サスシテ豫審
判事ニ送致シ豫審判事ハ証憑ヲ具備セスシテ豫審ヲ終結ス
ルカ如キ事アルニ於テハ實際不都合少ナカラサルニ付以後
左ノ通心得ヘシ

第一條 司法警察官ニ於テ告訴告發其他ノ原由ニ因リ犯罪
アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ遲滯ナク

○百二十九

之ヲ檢察官ニ送致スヘキハ勿論ナリト雖モ成ルヘク充分ニ証憑及ヒ被告人等ヲ捜査シ起訴ノ資料ト爲ルヘク事實ヲ具備シ然後檢察官ニ送致スヘキモノトス尤非現行犯ノ場合ト雖モ報知書ニ依リ出庭シタル証人等ノ申立ヲ聽クハ妨ケナカル可シ(但急速ノ處分ヲ要スル事件ニ付テハ先ツ其事件ヲ檢察官ニ送致シ然後尙ホ捜査ヲナシ隨テ証憑ヲ得レハ隨テ送致スヘシ)

第二條 檢察官ニ於テ司法警察官ヨリ被告事件ノ送致ヲ受ケ若クハ直ニ告訴告發其他ノ理由ニ因リ犯罪アールヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルハ自カラ捜査ヲナシ又ハ司法警察官ヲシテ更ニ捜査ヲナサシメ成ルヘク充分ニ起訴ノ資料ヲ具備シ然後豫審若クハ公判ニ付スヘキモノトス尤非現行犯ノ場合ト雖モ報知書ニ因リ出庭シタリ

証人等ノ申立ヲ聽クヲ得(但急速ノ處分ヲ要スル事件ニ付テハ先ツ起訴ノ手續ヲ爲シタル後尙ホ捜査ヲ爲シ証憑ヲ得レハ隨テ送致スヘシ)

第三條 豫審判事ニ於テハ檢察官ノ起訴其他ノ理由ニ因リ豫審ニ着手シタル後ト雖モ司法警察官ヲシテ必要ト思料スヘキ條件ニ付更ニ捜査ヲ爲サシムルヲ得ヘキモノナルニ因リ成ルヘク充分ニ証憑ヲ具備シ然後豫審ヲ終結セサルヘカラサルモノトス右及内訓候也

○第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第一百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其

處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第七百七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ
違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ
ヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第一百十條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得
第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲
ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ

調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ續聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告
訴人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ

第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪アルヲ認知シ
又ハ重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢
事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證
憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ

第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕
罪アリト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ
其所在ノ地若シハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ
告發スルヲ得

告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得但第九十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス
無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス

△(十四公布第七十三號)治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

無能力者

- 一 未丁年者
- 二 妻タル者
- 三 白痴瘋癲人
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
民事擔當人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 雇主(但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時)

第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルヲ得此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴

ヲ受クルコアル可シ

○第二節 現行犯罪

第百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

- 一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時
- 二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帯シタル時
- 三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

△(十四公布第四十六號四項)治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルコトヲ得

第百二條 司法警察官及ヒ巡査其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ

現行犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラズ又ハ逃亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

第百三條 巡査被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直

ナニ被告人ヲ逮捕スルヲ得

第百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引致スルヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡査ニ引渡ス可シ得

被告人ヲ巡査ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ
被告人又ハ巡査ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サルハ其求ヲ拒ムヲ得ス

○第二章 起訴

○第一節 檢察官ノ起訴

第百七條 檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ

一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ

三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四 被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第百八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ

其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第百九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ

事物ヲ送致シ且臨檢人可キ場所送シ可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

○第二節 民事原告人ノ起訴

第一百條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時ハ告訴ト共ニ之ヲ申立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テ受ケタル時ハ檢察官ノ起訴ナシト雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者トス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立テ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第一百一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若シハ其要ムル所チ變更スルコトヲ得

又私訴ノ願下チ爲シタル後更ニ其申立チ爲シ若シハ其要ムル所チ變更スルコトヲ得

第十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ棄權ヲ爲スコトヲ得被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人チ爲ス可シ

○第三章 豫審

第十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル規則ニ從ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第十四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ

得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第百十五條 豫審判事ハ告訴發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直ニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サ、ル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルヲナカル可シ

第百十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直ニ告訴發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢証處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルヲ得

第百十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スヲ得

○第一節 令狀

第百十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クとも二十四時ノ猶豫アル可シ

召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クとも出廷ノ日ヲ過クルヲ得ス

△(十四)司丙第十七號警視廳府縣東京府治罪法令狀樣式別紙丁

第二十八號ノ通大審院裁判所へ相達候條其旨可相心得且司法警察官ニ於テ令狀ヲ發スル時ハ右ニ照準シテ取計フ可シ此旨相達候事

別紙

△(丁第二十八號)治罪法中ニ掲ケタル送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀収監狀及宣誓書式別紙ノ通相定候條右ニ照準ス可シ此旨相達候事(別紙容ス)

△(十四司丙第二十號)大審院裁判所警視廳府縣(東京府)新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可心得此旨相達候事

△(十五司丙第六號)大審院裁判所警視廳府縣(東京府)始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタルニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ

左之通心得可シ此旨相達候事

第一條 逮捕狀ニハ典獄報知書ニ依リ第二號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相等ヲ詳記ス可シ

但管轄地ノ内外ニ拘ハラス急遽ノ際巡查ナシテ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ナシ

第二條 管轄地内ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第三條 管轄地外ハ第一號書式ニ準シ人相書ヲ作り之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ囑託スルコトヲ得囑託ヲ受ケタル檢事ハ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作り之ヲ管轄地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第四條 司法警察ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル時ハ之ヲ管

難檢事ニ送致シ檢事ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ照會シ別
段ノ事由アルニ非サレハ逮捕ノ地ニ於テ刑ノ執行ヲ爲スヘシ

△第十五百四第十四號大審院裁判所警視廳府縣東京府既決囚ノ
逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ義ニ付テハ明治十四年
丙第二十號ヲ以テ相違置候處始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ
外ハ現ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀
ト可心得此旨更ニ相違候事

△第十五百丁第十八號給審裁判所軍人軍屬ノ犯罪既決後逃走シ
タルニ付陸海軍衛ヨリ捕縛方依頼有之候節ハ本年本省丙第
六號迄ニ依リ捕縛方取付ヲ可シ此旨相違候事

第一百十九條 豫審判事ハ召喚示ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ
住セサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫
審判事ニ其處分ヲ囑託スルヲ得

第一百二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷
セサル時ハ勾引狀ヲ發スルヲ得

第一百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發ス
ルヲ得

- 一 被告人定リタル住所アラサル時
- 二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時
- 三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントス
ルノ恐アル時

第一百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタ
ル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ
勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可
シ若シ其時間ヲ超過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然
之ヲ釋放ス可シ

第二百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄
地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求
ムルコトヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速
ニ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ
△(十五司丙第七號大密院裁判所警視廳府縣(東京府)被告人逮捕
ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中拘留ノ義ニ付東京
經罪裁判所檢事犬塚盛龜ヨリ別紙申號ノ通伺出ニ付乙號ノ
通内訓ニ及ヒ候條爲心得此旨相達候事

〔甲號〕

明治十四年太政官第四十六號ヲ以テ(前略)犯罪ノ地分明
ナル被告ハト雖モ管轄裁判所アリ屬此アリタル時ハ其ノ
被告人逮捕ノ裁判所之ヲ管轄ス可キ旨御布告相成候處右
實際取扱方ノ義ハ被告人逮捕ノ地ノ檢察官ニ於テ事件ノ
模様ヲ審査シ其被告人ヲ管轄裁判所ニ送致スルヲ要セス
ト思料シタルトキハ專案ノ顛末ヲ犯罪地ノ檢事ニ通知シ
併セテ其囑託アル可キ哉否ヲ照會シ其囑託ヲ待テ起訴可
及手續ニ可有之果シテ然ラハ被告人所在地ノ司法警察官
ニ於テ其舉動犯人ト思料ス可キ者アル等現行犯ニ准シ處
分シ得ヘキ被告人ヲ逮捕シ拘留狀ヲ發シ一應ノ搜查ヲ爲
シタル後檢事ニ送致シタル時ノ如キ其拘留狀執行ヨリ概
テ已ニ六七日ヲ經過スルヲ以テ囑託ノ義ニ關シ檢事ヨリ
前記ノ照會中拘留狀下日ノ期限ヲ過クル者往々之アリ然
ルニ檢事ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若シハ被告人ヲ責付スル
ノ職權ナキニ因リ重罪犯又ハ逃走等ノ恐レアリテ解放シ
得ヘカラサル者ニ付テハ如何トモ處分ノ施シ様モ無之去
リ逆拘留日數經過ノ一點ニ拘束セラレ前審ノ照會ヲモ用

ヒスヲテ直ニ其被告人ヲ犯罪地ノ檢察官ニ送致スルカ如キハ囑託法ヲ設ケラレタル御旨趣ニ相戻リ可申又々前書ノ照會一々電報ヲ借ルニ至テハ其事案ノ頗未ヲ尽ス能ハサル而已ナラス此等ノ事件ハ實際頗々遭遇スル所ニシテ其經費モ亦少額ナラサル義ト存候就テハ右等ノ場合ニ於テハ如何處分致シ可然哉此段相伺候條至急何分ノ御指揮ヲ仰キ候也

東京經罪裁判所

檢事 犬塚盛鏡

司法卿大木喬任殿

〔乙號〕

東京經罪裁判所

檢事 犬塚盛鏡

被告人逮捕ノ地ノ檢察官犯罪ノ地ノ檢察官ニ照會中拘留ノ儀ニ付伺ノ趣ハ豫テ管轄裁判所ヨリ囑託ヲ爲シタルモノト看做シ一面ハ其裁判所ニ豫審若クハ公判ヲ求メ一面ハ其犯罪ノ地ノ檢察官ニ其旨ヲ通知スベシ此旨及内訓候也

△〔十四公布第五十九號〕治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ拘引セシメヨル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入世クベシ此旨布告候事

△〔十五丙兩四號裁判所警視廳府縣東京府神戶縣治罪法ニ定メタル拘引狀ノ期限ニハ總テ休暇ノ日ヲ算入ス可ラス但平常休暇ナキ官署ニ付ハ此例ヲ用サル儀ト可心得此旨相達候事
第百二十四條 前條ノ場合ニ於テ拘引狀ヲ發シタル豫審判事ハ

被告人ヲ拘留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル拘引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キ

一ヲ請求ス可シ

其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ拘引狀ニ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル拘引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ拘引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應ズル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ

第二十六條 拘留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第二百二十三條ノ場合

ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

第二十七條 豫審判事ハ拘留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クタル時ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責付ス可シ

檢事ハ被告人ヲ責付スルコトナク更ニ十日間之ヲ拘留ス可キコトヲ豫審判事ニ求ムルヲ得

第二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス

第二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概略
- 二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
- 三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルコト

第三百十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏各分明ナラサル時ハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名捺印ス可シ

拘引狀拘留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム

第三百十一條 又喚狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁ヲシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム

第三百十二條 拘引狀拘留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルコアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ

第三百十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若シハ他人ノ家宅ニ潛匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支アル時ハ隣佑貳名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ
巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコト得ス

△(十四公布第四十八號五項)治罪法第百三拾三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿持合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅館屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラス搜索致シ苦シカラス

第三百十四條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルヲ知リ又ハ潛匿シタリト思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スル時ハ巡查ニ令狀ヲ帶行セシムルヲ得

巡査ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

△(十五司丁第二十四號裁判所)左ノ通豫審判事ニ及内調候條此旨相達候事

輕罪裁判所豫審判事

治罪法第三百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡査ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ上告事件殊ニ急遽ヲ要スル時ニ限り輒ク其處分ヲ爲ス可キ者ニアラス又第三百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スル者ハ專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハス悉ク人相書ヲ發スル者ニアラサルナリ此等ハ兼テ注意アル可キ事ナレバ猶ホ誤解無之様爲念此

段及内調候也

第三百三十五條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲ス可キヲ請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

△(十五司丁第十四號大審院裁判所)治罪法第三百三十五條ニ從ヒ豫審判事ヨリ各控訴裁判所檢事長ニ被告人ノ人相書ヲ送致シ若クハ其檢事長ヨリ管轄地内ノ檢事ニ搜查及ヒ逮捕ノ處分ヲ命スル時ハ本年本省内第六號達第一號書式ニ照依シテ人相書ヲ作り其命ヲ受ケタル檢事ハ第二號書式ニ照依シテ逮捕狀ヲ作ルヘシ此旨相達候事

△(十五司丁第十七號控訴裁判所)軍人軍屬ノ犯罪未決中逃走シ

タルニ付陸海軍衙ヨリ捕縛方依頼有之候節ハ本年省下第十
四號達ニ依リ捕縛方取計フヘシ此旨相達候事

第三百三十六條 陸海軍在營ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタル時
ハ所屬長官ニ令狀ヲ示スコシ長官ハ已ムコトヲ得サル差支アル
ニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ其行軍ノ際亦
同シ

第三百三十七條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令
狀ニ記載シタル監倉ニ引致スコシ若シ其監倉ニ引致スルコト能
ハサル時ハ假ニ最近ノ監倉ニ引致スルコトヲ得
何レノ場合ニ於テモ監倉長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ
其證書ヲ渡スコシ

第三百三十八條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ之ヲ執行シタル
コト又執行スルコト能ハサル時ハ其事由ヲ令狀ノ正本ニ記載スコ
シ
巡查ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ書記局ニ差出シ書記ハ其受取
證書ヲ渡スコシ

第三百三十九條 勾留狀又ハ收監狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監倉若
クハ獄舎ニ在ル時ハ書記ヨリ之ヲ本人ニ送達シ其旨ヲ正本及
ヒ謄本ニ記載スコシ

第四百十條 密室監禁ノ場合ヲ除クノ外被告人ハ監獄則ニ從ヒ
官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ代言人ニ接見スルコト得
書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非サレハ
被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事ハ其書類
ヲ留置クコトヲ得

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者
ニ非スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀

ヲ取消ス可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ

第四百四十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之ヲ貸與ス可シ

○第二節 密室監禁

第四百四十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ旨渡ヲ爲ス可シ得

第四百四十四條 密室監禁ノ旨渡ヲ受ケタル被告人ハ壹名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サス
食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ

指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百四十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其旨渡ヲ更改スルヲ得

旨渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ
豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

○第三節 證據

第四百四十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルコトナシ
被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ微憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百四十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據微憑ヲ

集取ス可シ

第四百四十八條 豫審判事臨檢家宅捜索物件差押又ハ被告人証人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急造ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサル時ハ立會人貳名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏壹名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

○第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百四十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ証人ヲ訊問スルニ付キ急造ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ

恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス

第四百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第四百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キコト申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第四百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第四百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人達ナキコト其他

事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時
ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコト
得

第百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切
ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀開ス可シ
第百五十一條第百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用
ス

第百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞
ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時
ハ通事ヲ命ス可シ
被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ
書記ハ通事ニ調書ヲ讀開カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百九十二條第百九十三條第百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ
適用ス

○第五節 檢證及ヒ物件差押

第百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ
重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

△(十四司丙第十五号警視廳府縣東京府ヲ除ク)治罪法實施ノ上ハ豫審
判事檢証及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡
査ヲ同行シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ
可達置此旨相達候事

△(十四公達第八十二號官省院使廳府縣)司法官吏ヨリ巡查及ヒ
兵員ヲ要求使用スルニハ左之手續ニ從フヘシ此旨相達候事
第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及

ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡査又ハ憲兵率ヲ使用スルコトヲ得
但事機緊急ナル時ハ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直ニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

△(十五)司丁第三十三号大審院裁判所〔審理ノ都合ニ依リ檢證ノ爲メ囚人召連他所出張候節ハ警察官へ護送引致方通知可致尤右護送ニ屬スル費用ハ渾テ警察費ヨリ支辨ノ筈ニ候條此旨相達候事

△(十五)内乙第三十五号警視廳府縣東京府〔裁判所ニ於テ檢證ノ爲メ囚人ヲ召連レ他所出張ノ節ハ巡査ヲシテ護送セシムヘシ此旨相達候事
但護送巡査ノ旅費其他囚人ニ屬スル費用共渾テ警察費ヨリ

支辨スヘシ

第五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ
又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押コ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ

物件ヲ竊匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得
被告人又ハ物件ヲ竊匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親
族若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第三百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人
ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判
事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得
但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遲延ス可カラス

第三百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第三百六十條ノ
規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目録ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第三百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタル

ト否トチ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第三百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽ク
ヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス
可シ

第三百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限

ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之
ヲ留置スルヲ得

第三百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖ヒ時宜ニ因リ臨檢家
宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

八(十四)公布第四十六號(六項)治罪法第六十八條第七十二條

ニ於テ治安判事ニ囑託スルコトヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルコトヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ
驛邊電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ
前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス
ヘシ

○第六節 證人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指各シタル者ヲ呼出ス可シ
原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ

最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者選罪事件ニ付テハ各五名
重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス
又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出ス可トヲ得

第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得
若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其
裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ。

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可
シ。

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾
引スルコアル可キ旨ヲ記載ス可シ。

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二十四時ノ猶豫アル可シ。

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應ス
ル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊
問ス可シ。

第七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍属ナル時

ハ其所屬之官ヲ經由テ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セ
シム可キコトヲ證明シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ

其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ。

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク

ノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓
以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ
許サス。

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ
送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得但し其費用ハ證人チシ
テ之ヲ擔當セシム。

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾
引狀ヲ發スルコアル可シ。

第七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサ
ルコト其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難
キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ

檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書

記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲ證明

ス可シ

第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏

名年齢職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ

問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳

述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ

署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ンコトヲ許サズ假事

實參考ノ爲メ其陳述ヲ聽クヲ不得

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受

クル者

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未満ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁

錮ノ刑ニ該ルキ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付曾テ訴ヲ受ケ其證憑充分ナ
ラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓ノ陳述ヲ肯セサル時
ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言
渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶
其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前
項ノ例ニ在ラス

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス
可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又
ハ被告人ト對質セシムルヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必
要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スル

若シ證人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從
ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テ
モ亦之ヲ適用ス

第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共
ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ
其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲ササルノ事由ヲ記載
ス可シ

第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラ
シムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ
證人ハ其陳述ヲ變更増減センヲ請求スルヲ得書記ハ其請求

アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ
證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヲ能ハサル
時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ
得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ
等シキ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

△二十五司丙第二十五號大審院裁判所警視廳府縣東京府刑法治

罪法實施以來刑事ニ付出廷セシメタル證人鑑定人等ノ旅費

日當等一時官廳ニ於テ立換渡チ爲シ候儀モ有之候處該旅費

日當等ハ則チ裁判費用ニシテ總テ被告人ノ擔當スヘキモノ

ナルハ勿論ノ儀ニ付自今右立換渡チ爲スニ不及候ト心得

但從前ノ指令及ヒ内訓本文ニ抵触スル件々ハ都テ取消候

○第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラ

シムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定

スルヲ得可キ者壹名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可

シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應

ジサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス

可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其
宣誓ハ第八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之
ニ宣誓書ヲ添置シ可シ

第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサ
ル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰
金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十一條第八十二條ニ記載シタル者ニハ
鑑定ヲ命スルコトヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者
ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ
鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムコトヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲
シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ
鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見
ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ
契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取タル年月日ヲ記載シ書記ト共
ニ捺印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置シ可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通
事ノ作りタル譯本ヲ添置シ可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與

大可シ

○第八節 現行犯ノ豫審

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待ラス直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲ヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條

檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ進ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

△第十四公布第四十六號七項(治罪法第二百五條第一項但書ニ司

法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當

分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ若シカラス

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊

問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ

請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサレ者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ
放免ス可シ

△(十五公布第五十三號)治罪法第二百六條第二百七條中ニ二十

四時内ト有之處已ムテ得サル場合ニ於テハ當分ノ内五日以

内ニ於テスルコトヲ得

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場

合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ
得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ

付キ更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタ

ル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置シ可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發

シタルト否トニ拘ラス被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ

及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

○第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被

告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出

廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲

ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ時金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出ス可シ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ヲナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徴収ス可シ
第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ

取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トチ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

△(十四公布第四十七號)刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニ

ハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時コテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

○第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致スヘシ
檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付スヘシ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料セタル時ハ其餘件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコト得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付スヘシ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シフル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結スヘシ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコト認メタル時ハ其旨ヲ言渡スヘシ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付スヘシ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲スヘシ
一 犯罪ノ證據充分ナラサル時

ハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ證書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責付中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消スヘシ

○第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致スヘシ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付スヘシ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付スヘシ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結スヘシ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡スヘシ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付スヘシ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲スヘシ

一 犯罪ノ證據充分ナラサル時

- 二 被告事件罪ト爲テサル時
 - 三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時
 - 四 確定裁判ヲ經タル時
 - 五 大赦アリタル時
 - 六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時
- 本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スコト得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ附シ又ハ責付ヲ爲スコト得

若シ被告人未タ拘留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルコトヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ附シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ録審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キコトヲ記載スヘシ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付スヘシ

答辯ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ

拘留ス可キ時ハ其理由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルコト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其理由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ充分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

△〔十五司号外〕被告事件禁錮以上ノ刑ニ該リ輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移ス可キ場合ニ於テ留置ヲ要スル者ト思料スル時ハ豫審終結前收監狀ヲ發スル債ト心得可シ此旨及内閣候也

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結言渡書ノ原本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キコトヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡答ナル報告書ヲ差出ス可シ

△〔十五司丁第五號始審裁判所〕今般刑法治罪法實施ニ就テハ今

後刑事裁判統計表ノ材料ニ供候間別紙表式ニ準シ毎年一月

一日ヨリ十二月三十一日マテノ豫審事件ヲ記載シ翌年二月

マテニ取纏メ差出スヘク候條此旨相達候事

但治罪法ニ拘ハラス從前ノ規則ニ從ヒ處分セシ者ハ件數

及人員ノミヲ別紙ニ記載シ可差出又ハ公判ノ條件ハ追テ

相達候マテハ從前ノ箇條ニ從テ取調置クヘキ事（別紙表式略ス）

○第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終

結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スコトヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ササル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スコトヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ

趣意書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手

人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタ

ルニ付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上

ニテ趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ

判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結

ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スコトヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人

ヨリ豫審終結ニ至マルテ豫審判事ヲ忌避スルコトヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配

偶者ト親屬ナル時

二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等

ノ者ノ親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽

許セタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申

立ヲ爲スニハ趣意書二通ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受タル

ヨリ二十四時内ニ其中立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ

紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ設置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其中立

人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得

會審局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯論書ニ依リ判

決ヲ爲ス可シ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其中立ヲ

棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス

可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

又急遽ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得

第二百四十一條 會審局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル

時ハ上告ヲ爲スコトヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非カレ

ハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由

アルコトヲ認め又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會審局ニ回

避ノ申立テ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲ス可シ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコトヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ハ思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルコトヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ檢事ハ其申立テ許否ス可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ旨渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ旨渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ旨渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ旨渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但旨渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書
ヲ差出ス可シ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ
何時ニテモ附帶ノ故障ヲ爲ス可シ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス
可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル
時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋
責付ヲ取消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議
局ニ差出ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ

故障ノ判決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又
ハ幾分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ
又被告人ヲ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡ヲ爲ス可シ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲ
シテ更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付更ニ取調ヲ
爲シ其報告書ヲ差出カシム可シ

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄違越權又ハ公
訴受理ス可カラサルヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事
ノ言渡ヲ取消ス可シ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケ
サル者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコト發
見シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシ

テ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差出サシム可シ
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判
決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本
ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上
告ヲ爲ス可シ

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ
上訴スルヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ
規則ニ從ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フ
コトナカル可シ

第二百五十九條 第二百一十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ

第二百一十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事長
言渡書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致
ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス
ノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ
重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事連
ニ其進行ヲ爲ス可シ

△二十五司内第十八号大審院裁判所警視廳府縣東京府治罪法第
二百六十條ノ場合ニ於テ被告人ヲ重罪裁判所開廳ノ地ノ監
倉ニ移ス時ハ檢事ハ前令狀ニ檢事長ノ命令書ノ寫ヲ添ヘテ
重罪裁判所檢察官ニ送致シ其檢察官ハ是等書類ヲ其地ノ監
倉長ニ示シテ被告人ヲ收監セシムルノ處分ヲ爲ス可シ其他

法律ニ從ヒ被告人ヲ他ノ監倉ニ移ス場合ニ於テモ此例ニ準
スル義ト心得可シ此旨相違候事

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡證
定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受
ケルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス
新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於
テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四章 公判

○第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ
從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序
ヲ變更スルコトヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル
時モ亦順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之
ヲ公行ス否ヲササル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

△(十五) 司丁(二十) 大審院(諸裁判所) 裁判傍聽ノ議ハ官民ヲ擇
ハス澤テ傍聽席ヘ相回シ可申此旨相違候事

但外國人ニシテ公然ノ照會ヲ經タル者ハ此限ニ在ラス

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辨論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公庭ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スニテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辨論スルコトヲモサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辨論ノ爲メ辨護人ヲ用フルコトヲ得辨護人ハ裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ撰任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得ザル時ハ代官人ニ非サル者ト雖モ辨護人ト爲ス可トヲ得

第二百六十七條 被告ハ公庭ニ於テ對行又ハ喧嘩ヲ爲シ辨論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ従ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若シハ拘留スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辨論及ヒ裁判言渡ヲ爲ス可トヲ得

若シ被告二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辨論ヲ停止ス

辨論ヲ取替リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辨論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルコト以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辨論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ

審判官等事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ
其後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判官渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ
出席モスト雖モ筆管終結ノ旨渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ逶達シ

タルノ證アルニ非サレハ開席裁判ヲ爲ス可カラズ

豫審官等ノ旨渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ逶達スルコト能ハサル場
合ニ於テハ裁判所ニテ豫審ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出
廷セラルル時ハ開席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戸長
ニ逶達ス可シ

第二百七十條 開席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルコトヲ

許サズ但シ親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ
證明スルコトヲ得

裁判所ニ於テ其事由テ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽

キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷
シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ
處置ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷
セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ
其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察
官ノ意見ヲ聽キ直ニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ旨
渡ヲ爲ス可シ

書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル
可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ
輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ預審判事ニ送付スルノ旨ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ假令論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス
若シ附帶ノ事件ニ付キ預審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事被告人ハ始審終審ニ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得
裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル理由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニ
テモ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第
二百三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停
止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シ
タル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可
キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ
又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官及ノ作リタル調書及ヒ證據書類

ヲ朗讀セシムルコトヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效チ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟
關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之
ヲ呼出スコトヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨ
リ其裁判所ノ允許ヲ爲テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得

△(十五)司丙第十号大審院裁判所警視廳府縣東京府治罪法第二

百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作リタル司法警察官ヲ證人トスル

件ハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及
ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ此旨相違儀事

△(十五)司丙第二十二号大審院裁判所警視廳府縣東京府東京憲

兵本部治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人ト

シテ公庭へ呼出ス時ハ本年本省内第十号達ニ準シ處分スル
義ト心得可シ此旨相達候事

但巡查及ヒ等外吏ハ此限ニアラス

△(十五司内第三十二号大審院裁判所警視廳府縣東京府憲兵本
部總テ官吏ヲシテ職務ニ關スル事件ニ付證明セシムル爲メ
其呼出ヲ要スルハ本年當省内第十号達ニ準シ取扱ヲ可シ
此旨相達候事

但シ巡查及ヒ等外吏ノ着席ハ此限ニアラス

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出ス
コトヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、
ル時證人呼出テ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ
陳述ヲ比較スヘキ時ハ檢察官其關係人ノ請求ニ因リ又

ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦
之ヲ適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辨論

ニ立會フ可カラス

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

- 一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
- 二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人
- 三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊
問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序
ヲ變更スルコトヲ得

第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問

スルヲ得ス

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得

訴訟關係人ハ辨論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問スヘキヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スルヲ得

第二百九十三條

證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條

前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達スヘシ

其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消スヘシ但重罪裁判所閉庭ノ後ハ其閉庭シタル裁判所ニ其申立ヲ爲スヘシ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

檢察官日テ其請求ヲ爲カ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル料料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡スヘシ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルコトヲ得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ辯ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ說明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分スヘシ

第二百九十八條 被告人譯者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第二百五十七條ノ規則ニ從フ

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ
裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

第三百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辨護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言スヘシ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルコトヲ得ス
檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スコトヲ得但辨論ノ最終ニハ被告人又ハ辨護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ抛棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條 辨論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直ニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始末終管ヲ同ハス何時ニテモ其訟訴ニ關係スルヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ナシ其訟訴ニ關係セシムルヲ得
若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直ニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證據ヲ明示スヘシ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證據ナキヲ明示スヘシ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

△(二十五)内第二十六號大審院裁判所警視廳府縣(東京府)治罪法

第三百七條第二項公訴裁判費用官ニ於テ豫當スヘキ場合該金額ハ裁判所ヨリ支出スル債ト心得ヘシ此旨相違候事

但從前ノ指令内訓本文ニ抵牾スル件々ハ取消候事
私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ豫當ス可

第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トナ同ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非ヤレハ上訴ヲ爲ス可シ得ス

第三百十一條 勾留ヲ受タル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其中立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ申立書ニ添ヘ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得
上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ
上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟

關係人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ
上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ
非カレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ
之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作リ書記ト共ニ署名捺印ス
可シ

裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預
シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又
ハ其拔書ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書
記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

△(十四司甲第七號)治罪法第三百十五條裁判言渡ノ謄本又ハ其
拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト
可心得此旨布達候事

△(十四司丁第三十一號裁判所)本年本月甲第七號布達裁判言渡
ノ謄本又ハ拔書ヲ求ムル者代價ノ義無資力ニシテ上納スル
能ハサル者ニ限り無代價ニテ下渡スモ不苦義ト可心得此旨
相達候事

△(十五司丙第十二號大審院裁判所警視廳府縣^{東京府}除ク)明治十四
年十二月當省甲第七號布達裁判言渡ノ謄本又ハ其拔書ヲ下
付スル費用ハ當分違警罪ニ限り徴收セサル様取計ヘシ此旨
相達候事

△(十五司丁第九號裁判所)十四年甲第七號布達裁判言渡ノ謄本
ヲ求ムル者上納金並ニ全丁第二十六號使丁規則第十五條ノ
違約金徴收ノ上ハ雜收入ニ組入月々本省ニ納附候儀ト可心

得此旨相違候事

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ告知シ又ハ闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期限ヲ言渡書ニ記載ス可シ
若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲ササル時ハ其事由

四 原被、證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ナ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ
第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載スヘシ

辨論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

辨論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載スヘシ檢

察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條

公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整理シ
裁判長及ヒ書記署名捺印スヘシ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見
アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條

裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所
ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書
ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

○第二章 違警罪公判

第三百二十一條

違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ
受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼

出狀

二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ

言渡

△六十四公布第四十四號(違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ前

罪法ニ從フヘシト雖モ實際己ムヲ得サル場合ニ於テハ當分

ノ内便宜取計ヲヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此

旨布告候事

第三百二十二條

呼出狀ニハ呼出ヲ受クヘキ者ノ氏名職業住所

出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ

旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未

タ其證人ヲ呼出サル時ハ公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル

後其呼出及ヒ辨護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムヲ得

第三百二十三條

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶

豫アルヘシ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスシテ檢證處分ヲ爲スコトヲ得

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシ其陳述ヲ聽クコトヲ得
第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀スヘシ
檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ差出サシムルコトヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス